
河童と女神と夏休み～あたしの遠野物語～

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河童と女神と夏休み～あたしの遠野物語～

【データ】

2019年

【作者名】

橋伊津姫

【あらすじ】

夏休みを利用して、岩手県・遠野のおばあちゃんの家にでかけたメグミ。

そこには赤ちゃんを生んだばかりのママが待っているはずだった。でもパパもママも赤ちゃんにメロメロ。構つてもうえない事に怒ったメグミが放った一言が、どんな事態を引き起こして……。

リンク友達「うらやまのひみつき」連さまで捧げます。

血サバイタ」、『暗黙迷宮』など公開中。

その夏、赤ちゃんを産んだママが里帰りしてくるおばあちゃんの家に、パパと二人で行く事になった。

おばあちゃんの家は、岩手県遠野市。民話や昔話がたくさん残つてるって聞いたけど、そんなのどーでもいいや。

「もうすぐだぞ。メグミも赤ちゃんに会うの、楽しみだろ？」「パパは朝から機嫌がいい。

「病院で会つたきりだもんなん。だいぶ大きくなつたかな。早く会いたいだろ？」

「別に……」

ついこの前、病院を退院したんだもん。いきなり大きくなつてゐわけ、ないじやん。

「馬つ鹿みたい」

どんどんおばあちゃん家に向かつて走る車の中から、窓の外をながめて小さくつぶやいた。

ああ、つまんない、つまんない。

そりやあ、ママに会えるのはうれしいけど。もう一週間以上も会つてないし。

車はにぎやかな通りを抜けて、山の方へ向かつて進んで行く。駅前を過ぎると、とたんに周囲はさびしくなつてくる。

「なあんにもないじやん」

畠とたんぼと山。それだけ。

「静かでいいトコだぞ」

そう言えば、パパもこいらへんの出身なんだつけ。

「まだ着かないの？」

「んん？ ああ、もうすぐだ」「さつきっから、そればっかし。

あーあ、学校のみんなは夏休み、楽しんでるんだろーなあ。

「あきちゃんは遊園地に行くんだって。たかちゃんは、今年は海外に旅行つて言つてたよ」

「へえ、そうか。でもメグミだつて、出かけるんじゃないか。おばあちゃん家まで、旅行だろ?」

バツクミリ一越しに、パパが話しかけてくる。

……やっぱり、分つてないや。

アタシが大きなため息をついている間に、車はおばあちゃんの家の前に着いた。

数えるほどしか来た事はないけど、来るたんびに思つんだよね。

「相変わらず、おつきい家だなあ」

今風の家じゃなくて、一階建ての古い木造の家。アタシの住んでる所じや考えられないくらい、広い庭。

その庭の隅に車を停めると、パパは大きくノビをして言つた。

「さあ着いたぞ、メグミ。荷物を運ぶの手伝ってくれ

「はあい」

気のない返事をして、車のトランクから大きなカバンを引っ張り出す。

つたく。何でこんなに荷物が多いのよ? 何ヶ月も旅行するわけでもないのに。

パパは荷作りがへタ。必要か、そうでないのかも考えず、目に付くモノは何でもカバンに入れてしまうから。だからいつだって、出かける時は大荷物になっちゃう。

これでも、ずい分減らしたのに……。

深くて大きなため息をついて、子供でも入っているんじゃないかと思つようなカバンを運んだ。

「ここにちはー。お世話になります」

開け放ちになつてている部屋の縁側に荷物を置いて、パパは奥に向かつて声をかけた。

「ああ、いらっしゃい。遠いとこ、良くなつたねえ。疲れたでしょう」

「ハロ、じゃないや。『カツポウギ』とかって言ひ、ダブダブの服を着たおばあちゃんが出てきた。

「あらあら、メグミちゃんかい？ 大きくなつて。お久しぶり。おばあちゃんの事、覚えてるかい？」

シワシワの顔、細い目、カサカサの手。アタシの覚えているおばあちゃんより、もつともつと「年寄り」に見えた。何か言わなきやと思つたけど、結局、何も思いつかなくて、ペコリとおじぎだけをした。

「ほら、メグミ。おやんとあこせつしなきや、ダメじゃないか」パパがしかめつ面でアタシに向かつて言つから、しかたなく小さな声で「こんにちは」とボソボソあこせつした。

「いいよ、いいよ。久しぶりなもんだから、勝手が分からんのでもう。まあメグミちゃん、上がって上がって。お母さんが待つてるとよ」

細い目がシワにひもれて見えなくなるほど二三二三しながら、おばあちゃんが奥の部屋の方を指差して教えてくれた。

「どうも」

アタシはもう一度頭を下げて、縁側からおばあちゃん家に上がり込んだ。

ちょっとと薄暗くつて、知らない匂いのする部屋を横切つて行くと、後ろでパパがおばあちゃんに話している声が聞こえた。

「すみません、お義母さん。何だか今朝から、あんな調子なんです。反抗期ですかね？」

「女の子は、みんなそうよ。じつしたつてね、女の子には難しい時期があるんだから」

ふん、放つておいてよ。

ツルツルでピカピカの廊下を歩いていくと、障子にガラスをはめ込んだ引き戸があつて、そこからママがいるのが見えた。

「ママ、来たよ！」

勢い良く戸を開けて、アタシは部屋に飛び込んだ。

平気なふりをしていたけど、やつぱりやびしかったから。学校から帰つても、朝になつても、夜寝る時だつて、ママはいな
い。

いつも「おかえり」とて言つてくれて、「起きなさい」とて言つてくれて、「おやすみ」つて言つてくれてたママがいない。そんな日が一週間以上も続いてた。

ママに会えるのだけが楽しみで、こんな所まで来たんだもん。ママだつて、きつと。

「メグミ、大きな声出さないで。今、赤ちゃんが寝たところなんだから」「え……？」

ママ？ うれしくないの？

ママは両腕に赤ちゃんを抱いて、布団の上に座つて、ちよつとだけ怒った顔をしてアタシの事を見ていた。

「う……ごめんなさい」

何だるい。どうしてママはアタシを見て、笑つてくれないんだろう？

「ああ、ここにいたのか。どうだい、赤ちゃんの様子は？」

アタシの後ろからヒョイと顔を出したパパが、部屋の中のままに声をかけた。

「いらっしゃい、パパ。疲れたでしう

「いや、大した事ないよ。自分の実家と距離はほとんど変わらないんだから」「あらら、残念。寝ちゃつた？」

「そうだつたわね」

パパの言葉に、ママは少し笑顔になった。アタシには笑つてくれないのに……。

「今ね。なかなか寝てくれないのよ、この子つてば」「ちょっと抱かせてもらつても、いいかな？」

「どうして、かしこまるのよ。自分の子供なのに」「どうして、かしこまるのよ。自分の子供なのに」

二人は楽しそう。アタシがここにいるの、忘れちゃったみたい。パパはママの腕から赤ちゃんを受け取ると、『ワレモノを触るようにして、そつと抱きかかえた。

「パパ、とけちゃいそうな顔。タレ氣味な目をもつとタレ目にして、赤ちゃんをのぞき込んでる。

「ちゃんと名前、出してきてくれた?」

「ああ、ちゃんと出してきたよ」

そう言つて、パパはアタシに向かつて赤ちゃんの顔が見えるように、体の向きを変えた。

「ほり、メグミ。」この子の名前は『ヒミ』だよ。『笑う』に『美しい』で、『笑美』つて言つんだ。カワイイだろ? メグミの妹だよ。パパの腕の中の「妹」は、正直、あんまりカワイイとは思えなかつた。

赤い顔、ペッシャンコの鼻、カワイくないよ。

ようやくママが、アタシの方を見てくれた。ホツとした。良かつた、忘れられたわけじゃなかつたんだ。

「メグミ、元気だつた? ちゃんとパパの言つ事を聞いて、いい子にしてたかしら?」

「うん、いい子にしてたよ」

ママの布団の横に座る。話したい事が一杯あつて、聞いてほしい事が一杯あつて。

ママにギコツとしてほしかつた。

「ママ、あのね」

アタシが話しうそつとした時。

「ふにゃあ……」

パパの腕の中で眠つていたはずの「妹」が鳴き声をあげた。歯が一本もない口を大きく開けて、体をふるわせて泣いている。

「ああ、起きちゃつたのね。おっぱいはさつき飲んだから、オムツかしら?」

せつかくアタシの方を見ていたママが、赤ちゃんの方を向いてし

また。

パパの腕から赤ちゃんを抱き取り、布団の上に寝かせてベージー服をまくる。

「お姉ちゃんに、あこせつじみつとゆつたんだよな
「そんなわけ、ないじゃない。せつと、メグミの声が大きかったの
よ」

何、アタシのせいなわけ？

紙オムツを広げると、赤ちゃんのオシリをふいて新しいオムツと取り替えた。

あー、あー、とむずがる赤ちゃんを胸元に抱いて、優しく揺らしながらあやし始めたママ。

「ダメねー。お姉ちゃんのこねえ」

もうママは、アタシの事を見ていない。

パパもママも赤ちゃんをのぞき込んで、口はパパ似ね、とか、鼻はママそっくり、とか話している。

アタシはだまって部屋を出ると、庭に面した居間の縁側に腰かけて空をながめた。

「……つまんないの」

縁側に、ゴロリと転がる。空が高くて、青い。庭の木ことまつているセミの声が、まるで降ってくるみたい。

「おや、メグミちゃん。どうしたの、こんなトロロド」

麦茶の載つたお盆を持つたおばあちゃんが、ビックリした顔でアタシを見ていた。

「赤ちゃんには、会つてきたかい？」

アタシの隣に座ると、おばあちゃんが聞いてきた。

赤ちゃんの話なんて、したくないよ

わざとふくれつ面になつて答えないでいると、おばあちゃんはアタシのほっぺたを指でツンツン、と突いてきた。

「まあまあ、カワイイお顔が台無しよ」

「カワイくなんかないもん。パパもママも、赤ちゃんばっかりかわ

いがつて。せつとアタシの事なんか、どうでもよくなつひやつたんだ

だ

「そんな事ないわよ。お父さんもお母さんも、メグミリヤさんの事が

大好きよ

「もう、いいよ。せつせつ、アタシのいる場所なんかないんだから

！」

勢いをつけて起き上ると、縁側の下にあつたクツをはいて庭へ飛び降りた。

「メグミリヤん、どこに行くの？」

驚いたおばあちゃんが、半分くついて腰を浮かしてアタシを見てた。

「つまんないから、外に出てくる

「暗くなる前に、帰つて来るんだよ」

おばあちゃんの言葉に振り向きもしないで、アタシは庭を走り抜けた。

兄妹との出会い

おばちゃんの家の裏手にある、小さな路地。その路地の突き当たりに、川があった。コンクリートで固められてない、石ころと草の匂い。

川には小さな橋がかかってる。その上からのぞいて見ると、すこく水が澄んでいて、川底の様子まで良く見える。

なのに、何だか深そうで、不思議な感じ。それでも気持ちがイライラしているアタシには、太陽を反射して光って流れる川のキレイさなんて、ちつとも心を動かされるモノではなかつたんだけれど。橋を渡ると、土手に転がつていた小石を蹴飛ばし、手近な草をむしり取つて川へ放り込んだ。

「来なきやよかつた。全然、楽しくない。すつじく、つまんない」妹なんか、欲しくなかつた。赤ちゃんなんて、大キレイ。パパもママも、赤ちゃんの方がいいんだ。もうアタシの事なんか、いらなくなつちやつたんだ。

そう思つたら、悲しくて、くやしくて、涙が出てきた。

「もう、ヤダ……」

自分の怒りをぶつけるよつこにして、アタシは手当たり次第に雑草をちぎつては、川の流れに投げ込んでいた。

「そんな事してると、川を汚すなつてカツパが出てくるよ」

後ろから急に声をかけられて、アタシはビックリして川に落ちそうになつた。

「キヤア！」

「わああ！」

アタシに声をかけてきた誰かも、驚いてアタシの服のすそをつかんで引つ張つてくれた。強い力で後ろに引かれて、そのまま土手の上にしりもちをついてしまつた。

「こつたあーい！」

スカートじゃなくて良かつた。でも、せつかくのお氣に入りのジーンズが、泥だらけ。

「大丈夫かい？」

オシリをさすつて痛がっているアタシの田の前に、誰かの手が差し出された。見上げると、同じ年くらいの知らない男の子が立っていた。

「 誰よ、あんた？ 急に声かけてくるから、ビックリしちゃつたじゃない」

ムカついたから、足手がせつかく差し出してくれていた手を払いのけると、アタシは自分で立ち上がりオシリをはたいた。 んもう。草と泥がくつついて、キレイになんない。

「ごめん。そんなに驚くと思わなかつたんだ」

陽に焼けた顔をした男の子。良く見ればその背中には、妹らしき小さな女の子がかくれている。

「君、この辺りの子じゃないだろ？」

両手についた泥に顔をしかめながら、アタシは男の子をにらみ付けてやつた。

「だから、何？ 聞いてんのは、じつちなんですけど」

思いつ切り機嫌の悪いアタシの声に、ビクッとして女の子は、男の子の背中にますますかくれてしまつた。

何よ。人の事、鬼かなんかだとでも思つてゐワケ？

「そんなに怒るなよ」

「川に落ちそつになつたのよ。怒るに決まつてゐじやない」

「だから、謝つたじやないかよ」

ふん。あんなの謝つたうちに入んないわよ。

「オレ、リュウつて書つんだ。『流れる』つて書いて、リュウ。そんで『ハイツが、ハイツ。『わんすい』に『丁』つて書くのさ。オレの妹。君は？」

「はあ？ 何でアタシまで、名前言わなきやいけないのよ？」

「オレ達は、ちゃんと名乗つたじやないか。次は、君の番だよ」

アタシは一人から田をそらすと、ふてくされた感じで答えた。

「メグミ」

「メグミちゃんかあ」

「気安く呼ばないでよー。」

さつき会つたばかりの子に、どうして『メグミちゃん』なんて呼ばれなきやいけないのよー。」

「じゃあ、なんて呼べばいいのさ?」

流と名乗つた男の子の背中から、ようやく顔を出した女の子
汀みぎわ、だつけ? が、オズオズと口を開いた。

「メ、メグミちゃん……」

メグミちゃん? 気持ちがそのまま、視線に出ちやつたんだろう

う。

「ふあっ……」

泣きそうな表情になつて、あわてて流の背中にしがみつく。

あーあ、もうカンベンしてよお。

「分かったわよ……。『メグミちゃん』でいいわよ」

ため息をついてそう言つと、汀、汀ちゃんは安心したように、ち
よつと笑つて見せた。

まあ、確かにアタシも態度、悪かつたしね。

出会いは最悪だつたけど、アタシは流と汀ちゃんの兄妹と一緒に
いる事が多くなつた。

別に待ち合わせをするワケでもないし、お互いの家を知つてゐるワ
ケでもなかつたけど、毎日、小川に行けば二人に会えた。

ここにはアタシの知つてる人なんかいなかつたから、一人と話が
できるのは、正直、うれしかつた。

おばちゃん家にいても、アタシはする事がなかつたし、パパもママもアタシがどこに行こうと興味がないみたいだつたし。

流はアタシと同じ十歳で、妹の汀ちゃんは六歳。体の弱かつた汀
ちゃんは、あまり外で遊んだ事がなくて、友達がいないんだつて。

「へつただなあー。こんなのが、簡単だろ?」

「そんな事言つたつて、アタシは初めてやるのよ。つまづくできる口

ケないじやない」

「だから、教えてやつたじやないか」

「あんな説明じや、分かんないよ」

言い合ひをするアタシと流の間で、汀ちゃんがオロオロと一人の顔を見比べている。

何を言い争つていいのかと言つと。

「ひつやるんだつて。見てるよ」

流は足元の平べつたたい石を拾い上げると、勢い良く腕を振つた。その手から飛び出した小石は風を切り、小川の水面に触れたと思つたとたん、大きく弧を描いた。

連續した波紋を残し、小石は水面を踊るように跳ねて行つた。

「すー」……

思わず見とれちゃつたアタシに、汀ちゃんが一ヶ口笑つて血艶

げにアタシに言つた。

「お兄ちゃんは、水切りがす」く上手なんだよ

汀ちゃんを見ると、本当にお兄ちゃんの事が大好きなんだなあ、つて思う。流の方も、そんな汀ちゃんがカワイくて、仕方がないみたい。

「ほら、メグミちゃんもやつてみなよ。腕を振る時は、水平になるよ」

さつき流が拾つたのと同じよつな、平べつたい小石を選んで、アタシは教えられた通りに川に向かつて投げてみた。

小石は水面に当たると、そのまま沈まらずに連續して跳ねた。

「ヤッタ!」

たかがこれだけの事なのに、柄にもなくアタシはハシャいでしまつた。

「やつたね、メグミちゃん」

汀ちゃんが両手を叩いて、喜んでくれる。

「やるじゅん

「まあね」

TVゲームも何もない。オシャレなお店も何もない。だけど、流と渕ちゃん達二人といふと、そんな事はどうでも良かつた。二人はちゃんとアタシの話を聞いてくれた。愛想笑いや、付き合いでも話を合わせてるんじやないつて分かるから。三人で土手に座つて、川の流れをながめた。

「ねえ、この川の名前って『カツパ淵』って言つのよね？ どうして？」

ふと思い出して、アタシは一人に聞いてみる。だつて、変な名前でしょ？ 「カツパ淵」なんて。

「ああ、そつか。メグミちゃんは『カツパ淵』の昔話を知らないのか」

土手に生えている草の葉っぱを千切つて、クルクル回していく流が田を丸くした。

「何だか、もうずーっと一緒に遊んでるみたいな気がしてたから、カツパ淵の話も知つてると思つてたよ」

そう言つて流と汀ちゃんの兄妹は、名前の由来を聞かせてくれた。

昔、むかしのお話。

土淵の新屋という家の裏に、とつても深い淵があつたんだそうな。ある夏の暑い日、その家の若者が馬の足を冷やしてやろうと、淵へ馬を連れて行き、そのまま遊びに出かけてしまつたんだ。

そうしたらそこへカツパが出て来て、馬を淵の中へ引きずり込むとしてな。ビックリ仰天した馬はカツパをぶら下げたまんま、馬屋に逃げ帰つてきたそうな。

今度はカツパの方が驚いて、馬の口サ桶を引つくり返して、その中に隠れていたんだと。

家の者達が「どうして馬だけが帰つてきたんだろ？ 」と不思議がつて、馬屋をのぞいて見たんだと。

そしたら口サ桶が引つくり返つて、小さな手が見えたんだと。開けて見たらば、そこにはカツパが隠れておつてな。

集まつて来た村の衆が「このカツパ、いつもいつも悪さして、ろくでもねえから殺してしまえ」と言い出したんだが、見つけられた

河童は涙を流しながら手を合わせて言ったんだと。

「もう悪さは一度としねえから、命だけは助けて下され」
新屋の主人は可哀想になつて「これからは、川の淵で絶対悪い事すんなよ」つて、許す事にしたんだと。

カツパも言う事を聞いて、そこから遠く離れた奥沢の淵に引越したんだとさ。

「この川は元々、大人の腰ほどもある深さの淵だつたんだ。それを今は、川底を埋めて浅くしてあるのさ。これじゃあ、カツパは住めないかもね」

「ええ？ だつて、おどぎ話でしょ？ 川が深くつたつて浅くたつて、カツパなんかいるワケ、ないじゃない」

流の話を聞いて、アタシは思わず鼻で笑つてしまつた。

だつて、カツパよ、カツパ？

この科学も進んで、人が宇宙にまで飛び出そとじしている時代に、カツパですつて？

「どうして？ どうして、いないと思うの？」

汀ちゃんが、不思議そうな表情でアタシに問い合わせた。

「どうして、つて……。もしかして、汀ちゃんは信じてるの、カツパ？」

反対にアタシが聞き返すと、汀ちゃんは素直にうなずいた。

「私は、いると思うな。ここちよつと先にね、常堅寺つていうお寺があるの。そこのお寺がね、火事になつちやつた事がつて、カツパ淵のカツパがお皿の水で火を消してくれたお話があるのよ。カツパをお祀りした『カツパ狛犬』だつてあるんだから」

笑い話……ではなさそ。ネタ……でもなさそ。

流も汀ちゃんも、大マジメな顔をしている。

「カツパ狛犬？」

狛犬つて、犬つて言うぐらいだから「犬」じゃないの？ あの神社の鳥居のそばにある、石の犬の事でしょ？ 和風のライオンみた

いな。お寺なのこそれがある事自体、何か間違つてこゐよつた気が……。

「見に行く?」

汀ちゃんが首をかしげて聞いてくるのに、また今度ね、と手を振つて答えた。

気がつけば、太陽はつい分とかたむいて、空も赤くなつてゐる。今、何時頃だらう?

ポケットから携帯電話を取り出して見てみると、時間は五時半を少し回つたあたりだつた。

そろそろ、おばあちゃん家に帰らなくちゃ。この辺りは、暗くなるのが早いから、油断しているとすぐ「夜がやつて来る。

「あーあ、帰らなくちゃ」

「何、メグミちゃん。帰りたくないの?」

アタシの囁きを聞きつけて、流が妙な顔をした。

「だつて、お父さんもお母さんも待つてるんだる? 赤ちゃんだつて、メグミちゃんを待つてるんじゃないの?」

「そんな事、あるワケないじゃん。まだ生まれたばかりの赤ちゃんなんだよ」

せつかく忘れてたのに、思い出しちやつたじゃない。

「それに パパもママも赤ちゃんに夢中で、アタシの事なんか、どーでもいいんだよ」

おばあちゃん家に帰つたつて、アタシの事なんか誰も見てないんだから。

「みんな、赤ちゃん赤ちゃんつて。アタシがいなくなつても、あつと誰も気がつかないよ」

赤ちゃんが生まれてから、家にいても楽しくない。赤ちゃんがアタシのパパとママを取つちゃつたんだ。

「アタシの話なんか聞いてくれないし。何かつて言つと、赤ちゃんの所に行つちゃうし」

ずっと思つていた事を、アタシは流にぶちまけた。

「赤ちゃんなんて、つむぐて泣いて、おっぱい飲んで、オムツ汚すしかできないくせに」

「うん、やうだね。だからだよ」

「え?」

思わず、流の方を見る。

夕焼けに照らされて、流の横顔はオレンジ色に染まっている。

「泣いて、飲んで、出して、寝る。それが赤ちゃんの仕事だ。逆に言えば、それしかできないんだよ、赤ちゃんは。だからお父さんもお母さんも、何もできない赤ちゃんに手をかけるんだ。だつて、メ

グミちゃんは、自分の事が自分でできるだろ?」

「そりゃ

「そりゃ、やうだけど。」

「そんな事言つたつて、アタシだつてまだ子供だよ。パパやママに話を聞いてほしい時だつて、あるのに……」

「うん。分かるよ。オレもそうだつたから

「流も?」

「うん。汀が生まれた時、オレも同じく泣いた。だからメグミちゃんの気持ちも、良く分かる。でも今は、汀の事カワイイと思つてゐる。メグミちゃんもきっと、妹の事をカワイイと思えるようになるからね」

本当に、やんなふうに思えるようになる田が、来るのかな?

「だからね、メグミちゃん。赤ちゃんの事をいらないだなんて、そんなふつつちやダメだよ。そんな事を言つてると、早池峰の神さまが来て、赤ちゃんを連れてつちやうかりね

流と汀ちゃんと別れて、おばあちゃん家に帰つたのは、辺りがずい分と暗くなつてからだつた。

思つていたよりも長く、二人と話し込んでたみたい。

ただいま声をかけて家の中へ入ると、ちょっと怒つた顔をしたパパと、心配そうな顔をしたおばあちゃんが待つていた。

「メグミ、ほんに暗くなるまで、どこに行っていたんだ？ おばあちゃんが、すごく心配してたんだぞ」

「おばあちゃんが？ おばあちゃんだけなの？ パパの言葉に、アタシはカチンときた。

「パパは？」

「何だつて？」

「パパはアタシの事、心配してくれたの？ それとも、赤ちゃんの方が大事で、アタシの事なんか忘れてた？」

思いつ切りパパをにらみつける。

「そんなはず、あるワケないだろ？！」

「ウソばっかし。アタシの話も聞いてくれないくせに！ アタシの事なんか、どうでもいいくせに！」

止まらないんだもん。自分でも、こんな事言ひちゃダメだつて分かってる。けど、一度口にしたら、もう止められないんだもん。

爆発しちゃつた気持ちをどうしようもなくて、アタシは怒つてパパの横をすり抜けて駆け出した。

後ろで、アタシの名前を怒鳴つているパパと、落ち着くよつよつとつてているおばあちゃんの声がした。

アタシだつて怒つてるんだから。アタシ、大人じゃないんだよ。まだ子供なんだよ。

どうして分かってくれないんだ？ そう思つたら、涙が出てきて止まらなくなつてしまつた。

ママに会いたい。ママにギュッつて抱きしめもらいたい。ママに頭をなでてもらいたい。

アタシはママの寝ている部屋に、飛び込んだ。

「ママー！」

勢いよく引き戸を開けると、中にいたままが口元に人差し指をあてて、シーッと言つた。

「今よつやく、眠つたところなのよ。静かにしてちょうだい」

そう言つと、胸に抱つこして赤ちゃんと布団に寝かしつけた。

「ママ、あのね」

「メグミ、後にしてくれない？ 笑美が眠っている間に、少しでも休んでおきたいのよ」

話しかけようとするとアタシの言葉をさえぎって、ママは首と肩を回した。

「夜もあんまり眠れないんだから。お話なら、パパに聞いてもらいたなさい」

「ママ！ アタシの話を聞いてよ！」

頭にきたアタシが大きな声を出すと、それに驚いた布団の赤ちゃんが、ふええと泣き出してしまった。

「ほらもう。メグミが大きな声出すから、笑美が起きちゃったじゃない」

ママはアタシの事をこらむと、ぐずぐずの赤ちゃんを布団から抱き上げた。

「ママ、ねえ！ 話を聞いてってば！」

アタシは必死になつて、赤ちゃんを抱いているママの腕を引っ張つた。

取らないで、取らないで、アタシのママよ。取らないで、返してよ！

「メグミ、いい加減にしてちょうだい！ そんなに引っ張つたりしたら、笑美を落としちゃうでしょ。あなた、お姉ちゃんなんだから、妹にイジワルしないの」

そして視線を赤ちゃんに戻すと、あやしながら優しい声で

「ダメなお姉ちゃんねえ」と語りかける。

「ママのバカ！ アタシ、お姉ちゃんじやないもん。お姉ちゃんになんか、なりたくない。赤ちゃんなんかいらない。妹なんか、どうか行っちゃえ！」

「メグミ！ ！」

「バカバカバカ！ ママなんか、大っキライ。パパなんか、大っキ

ライ。赤ちゃんなんか、大っキライ。妹なんか、大っキライ。みんな、大っキライ！

どうしてママは、赤ちゃんばかりを大事にするの？ どうしてパパは、アタシのことを心配してくれないの？ どうして一人とも、アタシを見てくれないの？

どつか行つちゃえ！ 赤ちゃんなんか、どつか行つちゃえ！

アタシは廊下と部屋を走り抜け、自分用に『えられていた部屋に駆け込んだ。

フスマを力一杯閉めると、アタシは押入れの中にもぐり込んだ。パパの顔も、ママの顔も見たくない。声も聞きたくない。

押入れの狭いスペースに、毛布にくるまつて声を殺していたアタシは、うずくまつたまま少し眠つてしまつたみたい。

『…………グミ…………メグミ…………』

どにからか、アタシを呼ぶ声がした。

あたしの願い

『 メグミ』

その声に薄く田を開けると、白い光が視界に飛び込んできた。スゴく、まぶしい。

『 メグミ』

アタシを呼ぶ声は、白い光の中から聞こえてくる。田をこすつてよく見ると、光の中に何かがいるのが分かった。

「何？ 誰？」

少しずつ光に田が慣れてくると、大きな動物のような影と、その動物に乗つた人影が見てとれた。

『 メグミ』

影が光の中から進み出していく。

「 鹿？」

光の中にいたのは、雪のようになく、額に金色の星のある、大きな鹿。そして、その鹿に腰かけている、とってもキレイな女人の人だつた。

女的人は長い髪をいろんな花で飾り、昔話の そうだ、七夕の織姫さまみたいな ヒラヒラした着物を着ていた。

『 メグミ』

アタシの名前をずっと呼んでいたのは、どうやら、この女人みたい。

「はい、メグミはアタシです。あなたは誰ですか？」

アタシが答えると、女人人はちょっとだけ笑つたような気がした。『 わたくしは、早池峰奥宮^{はやちね}。そなたに話があつて、降りて来ました』 ずい分と不思議なしゃべり方をする人だなあ。おばあちゃんが見てた、時代劇に出てくる役者さんみたい。

「話？ アタシに？」

『 そう、そなたにです。そなた先程、赤子はいらぬと願いましたね

？ それがまゝじと、眞実であるなりば、わたくしが赤子をもつて
ゆきましょう』

「え、でも 」

確かに、こらないと思つた。どこかへ行つちやえ、とも。
『赤子がいなくなつてしまえば、父も母も、そなたを愛してくれる
と、そう思つたのでしよう？ ならば、わたくしがその願いを叶え
てあげましょう。そなたがいらぬと言つた赤子、わたくしがもうつ
てゆきます』

女人の人人がそう言つたとたん、鹿の額にある星が輝き出し、アタシ
はまぶしくて目を開けていた。まぶくなつた。

『忘れてはいけませんよ。赤子は、わたくしのものです。確かにわ
たくしが、もらいましたよ。覚えておくのですよ、メグミ』
待つてよー そんな、いきなり……。待つてよ、ねえ、待つて！
アタシは水の中でもがくよつて、消えていく光を追いかけようつと
した。

「待つて！ 」

『忘れてはいけませんよ、忘れては。いいですね、メグミ』
小さくなつていいく光の点に手を伸ばした時、アタシは肩を揺さぶ
られるのを感じた。

「……グミちやん、メグミちやん」

細く目を開けると、おばあちゃんがアタシをのぞき込んだ。いた。
押入れの中で眠り込んでいた。すつかり夜になつてしまつ
たみたい。おばあちゃんの後ろから差し込む部屋の明かりが、妙に
白く感じた。

「おばあちゃん……」

「まあまあ、こんなトコロで眠つちやつて。お腹、空いたろう？
そつが、眠つてる間に晩ご飯、食べそこねちやつたんだ。
体に毛布を巻き付けたまま、押入れの中からはい出ると、おばあ
ちゃんがお盆を差し出してくれた。

おつまみのおにぎりが一つ。お漬物の小皿とお味噌汁、熱そうな

お茶。

「ありがとう、おばあちゃん」

食べ物を見たとたん、アタシのお腹はモーレツに抗議を始めた。

お味噌汁をひと口すると、体中についたかさが広がった。

「おいしい」

両手を温めるみたいにお椀を持つアタシに、おばあちゃんは優しく笑いかけてくれた。

「よつほどお腹、空いてたんだねえ」

「おばあちゃん、パパとママは？」

怒ったまんまで飛び出して来ちゃつたから、一人の事が気になつた。

「大丈夫よ。お父さんもお母さんも、今はちょっと余裕がないのよねえ。一人には、おばあちゃんから話しておくれわ」

「うん……」

「安心なさい。お父さんもお母さんも、メグミちゃんの事を嫌いになつたりしないわ。メグミちゃんの気持ちせ、おばあちゃんにはよく分かるもの」

おばあちゃんの、大きな手。シワシシワットラシゴシした手。その手で、アタシの頭をなでてくれた。

「アタシの気持ちが？」

「そうよ。おばあちゃんにはね、兄妹が四人いるの。兄さんは年が離れていたけど、下の妹と弟とは年が近くでねえ。ちょうどメグミちゃんと同じくらいの頃だったから、妹が生まれたのは」

おばあちゃんは皿を細めて、過去を振り返るようにして話していくれた。

「あの頃は今みたいに病院で産むよりも、家にお産婆さんに来てもらつて、そこで出産する人が多かつたかねえ。おばあちゃんのお母さん、メグミちゃんの曾おばあちゃんになる人も、お産婆さんを呼んで出産したのよ」

「家で……。じゃあ、ずっと曾おばあちゃんの側にいられたの？」

「それがねえ。子供は邪魔になるからって、朝から部屋にも入れてくれなかつたのよ。子供だつて、心配よねえ」

ママが病院に入院する時も、スゴく心配だつた。あんなに大きなお腹で、夜中に急に苦しみ出して……。パパが大騒ぎしながら車で病院につれて行つたんだ。

でもアタシは子供だから、つれて行つてもらえなかつた。

「心配要らないから、おとなしく家で待つてなさい」

そう言われたつてさ……。心配いらないって言われてもさ、ムリに決まつてゐるじゃん。田の前で、お腹を抱えて痛がつていたママ。あの姿を見て、心配しない方がどうかしてゐる。

「出産には時間がかかつてねえ。妹が産まれたのは、夜になつてからだつたよ。おばあちゃんはもつ、心配で心配で。でも、部屋に呼ばれたのは曾おじいちゃんだけ。そのうちに待ちくたびれたおばあちゃんは、いつの間にか眠つてしまつたみたいでね。朝になつて部屋に入つたら、曾おばあちゃんは大事そうに赤ちゃんを抱つこしてたよ。おばあちゃん、何だか悲しくつてねえ」

アタシと一緒にママに会えたのに、ママはアタシのことを見てくれない。アタシに向かつて掛けられる言葉は、全部赤ちゃんの事ばかり。

「大好きな母親を、赤ちゃんに取られちゃつたような氣になつたもんさ。今のメグミちゃんみたいに。赤ちゃんなんかいらなつて、何度も思つたしね。だから、メグミちゃんの気持ちは良く分かるよ」おばちゃんが渡してくれた湯呑茶碗。入つてお茶は少し冷めてしまつたけど、それでも、アタシの手を温めてくれるには十分だつた。アタシの手と、アタシの心を。

「さあ、食べ終わつたら、ゆつくつとお休み食べ終わつた田と湯呑茶碗をお盆に載せて、おばあちゃんは部屋から出て行つた。

アタシはおばあちゃんが用意してくれていた布団にもぐり込んで

……少しだけ泣いた。

布団は、お旦様のニオイがした。

そして……あの奇妙な夢の事を、忘れた。

翌朝、アタシは家の中がなにやら騒がしくて、目が覚めた。

「何？ ひるさい……」

部屋のフスマを開けると、誰かが大声で泣いているのが聞こえた。

「ううん、あれは泣き叫んでいるんだ。

あわてて着替えると、アタシは声のする方へ走つて行つた。

叫んでいたのは……ママだつた。

部屋の中にペタリと座り込んで、大声をあげて泣いていた。手には小さな毛布を握りしめて。そして 赤ちゃん用の布団には、誰も寝ていなかつた。

「笑美が！ 笑美がいないのっ！ あなた、笑美がいなくなつてどこへ行つちゃつたの！？ ねえ、あなた、笑美は！？」

「落ち着け、落ち着くんだ。そんなに騒ぐと、体に障る。笑美の事は任せろ、絶対に探し出すから」

叫ぶママの肩を、パパがしつかりと押さえていた。

「どうしたんだろう？ 何があつたの？」

おばあちゃんがアタシに気が付いて、そつと廊下までつれ出してくれた。

「ね、おばあちゃん、何があつたの？ ママはどうしゃつたの？」

アタシの質問に、おばあちゃんは部屋の方を気にしながら、説明してくれた。

「実は、笑美ちゃんがね。夜中にお乳を飲ませた後、お母さんが目を覚ますまでの間に、いなくなつちゃつたんだよ。家の鍵も閉まつてたし、雨戸もちゃんと閉まつてたのに。誰も入ってきた跡はないんだよ。なのに、笑美ちゃんだけがいなくなつて……」

「赤ちゃんが……いなくなつた？」

部屋をのぞき込む。ママはパパにしがみついて泣いていた。その側に敷かれたままの、赤ちゃん用のベビー布団。シーツの白が目に

痛かった。

本当ならそこそこ、生まれて数週間の赤ちゃんが　アタシの妹
が寝ているはずなの。

「やつぱりアレは、夢じやなかつたんだわ。アレが笑美をつれて行
つたのよ！」

ママが泣いている。パパも泣いている。

あたしの決意

アタシが見上げると、おばあちゃんは何とも言えない顔をして教えてくれた。

「……鹿がね。雪みたいに真っ白な鹿が、赤ん坊をもらひと置いて、笑美をつれて行つたつて。そう言つんだよ。夢から目が覚めたら、もう笑美はいなかつたんだつて……」

鹿？ 白い鹿つて？

アタシはタベの不思議な夢を思い出していた。

雪のように白くて、額に光る星のある鹿。そしてあの、キレイな女人の人。

『わたくしが、赤子をもらひてゆきましょ』

あの人はそう言つた。

アタシが願つたから。赤ちゃんなんか、いらないつて。どこかへ行つちゃえつて。

「アタシの……せい？」

玄関に誰か来たみたい。

おばあちゃんが連絡したんだと思ひ。ちよつと太つたお巡りさんが、汗をふきながら立つていた。

「新屋のばあちゃん、赤ん坊がいなくなつたつてのは本当かい？」

「ああ、駐在さんかね。よう来てくれたよ」

話を聞くためにやつて来たお巡りさんを、おばあちゃんは玄関まで迎えに行つた。

今なら。今なら誰も、アタシの事を気にしてない。

アタシはそつとその場を離れると、自分が寝ていた部屋に戻つた。

白い鹿。女人の人。赤ちゃん。どうしよう。アタシがあんな事、言つたせいだ。だから、本当に夢の鹿が現れて、赤ちゃんをつれて行つちゃつたんだ。

そのままじつとしているワケにはいかない。だけど、どうしたら

いいんだろう？ 頭の中がグルグルする。

確かに、赤ちゃんなんていらないって思つたし、いなくなれって思つた。だけど、それで本当にいなくなるなんて、思つてなかつたのに……。

フスマを開けて様子をつかがつてみる。かすかに、おばあちゃんとお巡りさんの話し声が聞こえてきた。

「どうもなあ……。誘拐といつのとは、違つよつた氣がするんじやが」

「そつは言つても、赤ん坊がいなくなつたのは……」

「ばあちゃん、コレ、早池峰さんの『赤子取り』と違うんかい？」

「そんな……。もつそんな時代と違うじやろ」

「けど、誰かが外から入つてきたような跡は、どこにもないぞ。鍵もかかつとる。雨戸も閉まつとる。庭にも家の中にも、足跡一つ残つちやおらん。しかも、子供の気配に敏感になつとる母親の横から、鳴き声もあげずに赤ん坊だけ盗み出すなんてのう」

「だからと言つて、早池峰さんの『赤子取り』とは」

「第一、このちつこい町に、赤ん坊盗むような、心得違いの人間はおらんぞ」

早池峰さん？ どこかで聞いた事が。どこだつたかしら？ とにかく、こつしてはいられない。だけど、どうしたら？

「流に。流に相談してみよう」

考えれば、流に相談したからつて、何が解決するワケじやないんだけど。でも、その時は、それが一番いい方法だと思つたんだ。きっと、これからどんどん人が集まる。赤ちゃんを探すために、近所の人も警察の人も来るはず。人がたくさん来てからじや、家を抜け出すが難しくなるかも。

アタシはそつと部屋から出ると、玄関に向かつた。人の話し声が近づいてくる。早くしなくちや。

玄関に飛び降りてクツをつかむと、そのままクツ下で走り出した。道端に転がっている小石が、クツ下を通して足の裏に食い込む。そ

の痛みが、アタシを責めているような気がした。

カツパ淵。いつもと同じ川の流れ、いつもと同じ風、いつもと同じ川
流と汀ちゃんの兄妹。

「メグミちゃん」

アタシの先に気が付いたのは、妹の汀ちゃんの方だった。

「どうしたの、メグミちゃん？ クツもはかずに」

田を丸くした流が近寄ってくる。その顔を見たとたん、アタシの中にあつた細い糸が、ツツンと切れたような気がした。

「流、どうしよう。赤ちゃんが、アタシのせい。どうしよう、ねえ、どうしたらしい！？」

パパにもママにも言えなかつた。言えるはずがなかつた。おばあちゃんにだつて、言えないよ。

「一体、どうしたんだよ？ 泣いてちゃ、分からないよ」

泣いてる？ アタシが？

気が付けば、ほっぺたを涙が流れていった。

「はい、メグミちゃん」

汀ちゃんが小さい手で、ハンカチを差し出してくれた。それを受け取り、アタシは一人に話し始める。

パパの事、ママの事、赤ちゃんの事、自分の見た夢の事、おばあちゃんから聞いたままの夢の話。そして 赤ちゃんをいらなければ言つた、自分の事。

軽べつされるかもと思った。せつかく仲良くなつた、流と汀ちゃんの兄妹。その二人に軽べつされるのは、とても怖かつた。でも、一人にかくし事をしたくない。だから怖かつたけど、正直に全部話した。

「赤ちゃん、いなくなつたんだな？」

アタシの話聞き終わつた流は、いつもと変わらない口調で尋ね返してきた。

「夢の中に、白い鹿が現われたんだな？」

「うん。額の真ん中に、金色の星のついた、白い鹿。それと、キレイな女人」

あの女人人は、自分の事を何て言つてただろう? よく思い出せ

ない。

あまり耳にした事のない名前だつたような気がするけど。

「お兄ちゃん、それって」

「間違いないだろうな。早池峰のお使いだ」

笑い飛ばされるかと思つた。だけど流も汀ちゃんも、真剣な顔でアタシの話を聞いてくれる。

早池峰? そう言えば、家に来たお巡りさんもそんな事、言つてたかも。

「はやちね……おぐのみや……。そう言つてた。アタシの夢の中に出てきた、女人」

記憶をふるい起こす。うん、確かにそう言つてた。

「奥富つて言つたのか? それじゃ、早池峰の女神本人が出て来たつて事になる」

早池峰の女神? 何だろう、それって。

「あのね、メグミちゃん。この遠野の土地は、早池峰の山の裾野に広がつてゐる。そして、この土地を治めているのが、早池峰の女神。本当は神様っぽい、むずかしくて長つたらしき名前があるんだけど。でも私たちは『早池峰さん』って呼んでるわ」

「早池峰山の山頂に、小さな祭壇があるんだ。そこが奥富。女神の御座所なんだ」

アタシの夢の中に出てきた女人人は、山の神様だつたんだ。

「ねえ、お巡りさんがおばあちゃんに、『早池峰さんの赤子取り』つて言つてたの。それって、どう言つて事? おばあちゃんは『時代が違う』って言つてたけど

ずっと疑問だつた言葉。妙に心に引っかかる言葉。

「『赤子取り』か。まだそんな言葉、覚えてる人がいたんだ」話をしていくうちに、流の言葉使いがどんどん大人びていくよう

な気がした。

「うん、言葉使いだけじゃない。全身から感じるモノも、変化したような気がする。」

「『赤子取り』って言つのはね、メグミちゃん。昔、この辺りにあつた習慣の事だよ。北の土地の冬は厳しい。だから秋の収穫は、生きていくつえでとても重要だつた。雨が長くても、反対に降らな過ぎても、米の出来に大きく係わるからね。特に暑くならない夏は、村人にとっては大問題だつたんだよ。涼し過ぎると米が実らない。米が出来なければ、厳しい冬を乗り越える事は出来ない」

「前の年のお米とか、残つてないの？ それを合わせれば、冬を乗り切るぐらいにはなるんじや？」

「うん、そう考えるよね。でも昔は、一つの田んぼに対してかけられる税の割合は、厳密に決められていたんだ。出来不出来に係らず、一年にこれだけ、と決められていた」

「歴史で留つたわ。年貢つて言つのよね」

「やう。今みたいに室温を管理する施設がなかつたから、そろそろ長くは保管しておけない。そもそも、北国之地では余裕のある収穫は見込めない。年貢を納め、翌年の苗を育てるための米を除けば、食べていくだけで精一杯つて事になる。暑くならない夏は、その力ツカツの米さえもなくなつてしまつんだ」

どうして流は、こんな事を知つてゐんだろう？ 流つて、アタシと同じ十歳のハズじゃないの？

「食べる物がなければ、母親は体力をつけられない。体力がなければ、お乳が出せなくなつてしまつ。そうすると、力のない赤ん坊は冬を越えられない。だから」

流は少し悲しそうな目をして、言葉を続けた。

「その年に生まれた子供を、山の女神に還すんだ。育てられず、また冬を越せそうにない赤ん坊を、早池峰の女神に願つて引き受けてもらう。そうすると、お山の使いである白い鹿が現れて、赤ん坊を連れて行つてしまつんだ。これが『早池峰さんの赤子取り』だよ」

それじゃあ……。連れて行かれた子供たちは……。

「子供たちは？ どうなるの？」

「早池峰山に連れて行かれた赤ん坊たちは、女神に育てられて、山頂にある『開慶水』^{かいけいすい} という池の底の屋敷で暮らしてるので、言われてるわ。女神と一緒にね」

汀ちゃんが、そつとアタシの手を握つて来た。その温かい感触に、アタシは何かを思い出した。

抱っこされた、ママの手の温度。一緒に眠つた布団の中の、パパの体温。三人で食べたご飯の熱さ。お風呂のお湯。いろんなモノのいろんな温度。

でも、赤ちゃんの温度を思い出せない。

泣いているママの顔、怒つているパパの顔、笑つている一人の顔。でも、赤ちゃんの顔を思い出せない。

どんな顔をしてた？ どれくらいの大きさだった？ どんな手で、どんな足だった？

分らない。だって、触つてないから。だって、見てないから。

「アタシ 赤ちゃんの事、覚えてない……。アタシの妹なのに……」

…

涙が出た。今までの涙とはちがつ。自分の事じゃなくて、赤ちゃんの事を考えて流れる涙。

「アタシ、ひどい事しちゃつた……。どうすればいいんだろ？？」

「それはね、メグミちゃん。君が決めなくちゃいけない事だ。オレや汀は、メグミちゃんを手助けする事は出来ても、決定を下す事は出来ないんだ」

アタシはゆっくりと顔を上げて、流を見た。

「メグミちゃん、私もお兄ちゃんも、メグミちゃんの味方だよ。だから言つて。メグミちゃんはどうしたいの？」

汀ちゃんがキュッと、アタシの手を握りしめてくれた。

アタシがしでかしてしまった事だから、アタシが決めなくちゃいけないんだ。

「流、汀ちゃん。アタシ、決めたよ」

泣いていたママの姿が浮かぶ。苦しそうなパパの顔が浮かぶ。悲しそうなおばあちゃんの後姿が浮かぶ。

「赤ちゃんを、取り戻しに行かなくちゃ。でも」「でも、どうして？ どうして助けに行けばいいんだら？」

「それがメグミちゃんの出した答えなら」

「私たちが、それを手伝つわ」

「さあ、こっちへ来て」

一人に手を引かれて、アタシは川べりを少し歩いた。

流と汀ちゃんが向かっているのは、小さな小屋？ うつぶ、お社だ。そばには、カツバの像が一体。

「ここはね、『お乳の社』って言つんだ。赤ちゃんを産んだお母さんたちが、お乳の出が良くなりりますよ」と、つてお参りに来るんだ。中をのぞき込んでみると、旅館なんかでよく見る、旅の思い出ノートみたいなのが置いてあった。

「ここからどうするの？..」

「ここにはね、『赤ちゃんが無事に育ちますように』ってこつ、お母さんたちの願いがたくさんこもってるの。だから『赤ちゃんを助けたい』って思つメグミちゃんを、きつと守つてくれるよ」

そう言つて、汀ちゃんは側に生えていた草の葉っぱを一枚、ちぎりとつてアタシに渡してくれた。

「メグミちゃん、これね、『田隠し草』って言つた。これを田の上に置いてね」

細長い、小舟のような形をした、ツルツルの縁の葉っぱ。汀ちゃんの差し出してくれたソレを、アタシは受け取つてながめた。

「田の上に、コレを？」

これで一体何をしようかと悩んだらう？

「オレたちを信じて、メグミちゃん」

「もちろん、信じてるよー。信じてるけど、何をどうするのかぐらいい、教えてくれなきゃ……」

何も知らされないのは、ちょっと不安になる。

「きっとね、メグミちゃん、言つても君は信じないと思つよ。でも確かに、何も言われずにいたんじゃ、もつと不安になるかも知れない」

流が口ついぐらい真剣な顔で、アタシを見た。とても自分と同じ年だと思えない。

「これから言う事は、とても信じられない事かも知れない。だけど、これだけは信じて。オレも汀も、メグミちゃんを助けたいんだ」

流の力強い言葉に、アタシはうなずいた。

「この土地は、古くから山の神、川の神に守られて来た所なんだ。民話、神話が多く残るこの遠野は、不思議な力も多く残っている。さつき汀が言つていたように、人々の願いも強い力になるんだ。オレと汀はその力を伝つて、早池峰の女神の社を飛び石にして、山頂の御座所までをつなぐんだ」

聞いただけでは、何が何だか分らない。だけど、一人がアタシをどうにか助けようとしてくれている事だけは、信じられる。

「本当の事言つて、よく分らないんだけど……。それでも、それでも、流と汀ちゃんの事は信じるよ」

そう。アタシ一人じゃ、どうにも出来ない。早池峰山へ行く事も、赤ちゃんを取り戻す事も。だから、一人に任せよう。一人の言葉を信じよう。アタシを助けてくれようとしている一人の気持ちが、すごく嬉しかった。

「じゃあ、さつきの葉っぱを田に当てておいてね。周りの景色が変わる時に、気分が悪くなる人も、いるみたいだから」

「うん、分つた」

アタシは言われた通り、『田隠し草』の葉っぱをまぶたの上に当ててみた。少しだけヒンヤリとした葉っぱは、不思議な事に手を離しても落ちてこなかつた。

「それじゃあ、行くよ」

右手側から流の声がした。そして、一人が左右からアタシの手を

握る。

「しつかりつかまつててね」

左手側から汀ちゃんの声がする。アタシがそつとうなずくと、二人の声が重なった。

「「飛ぼづー」」

その瞬間、体がグラッとしたよな気がした。

何だか体の周りの空気」と、グンニヤリとゆがんでいるよな、引っ張られているよな、押されているよな、とても変な感じ。

「メグミちゃん、大丈夫?」

汀ちゃんの声がする。

「うん、大丈夫……だと思ひ。さあもうひつた葉っぱ、つけといてよかつたよ」

本当にそう思ひ。田を開じているから分らないけど、わざと周りの景色はグニャグニヤに溶けて、グルグル回っているはず。田を開けてたら、乗り物酔いみたいになつて、気分が悪くなつてたと思う。汀ちゃんの言つてた通りだね。

一度大きく体がゆれて、ガクンッという衝撃があった。

「何? もう着いたの?」

見えないから、様子が分らない。キョロキョロと頭をふつて、流と汀ちゃんにたずねてみる。

「残念だけど、ちがうんだ。ここは早池峰の女神の守護を受けた、社の一つだよ。一息には飛んで行けないけど、いつもやつて早池峰の力をたどって、力を分けてもらつて、女神の御座所まで行くんだ。さあ、また飛ぶよ」

流が答えてくれる。アタシは流の手をギュッと握った。

田を開じてアタシにとつて、握った手から伝わる温度だけが、世界の全部だ。

空気がゆがむ感覚と、体が落ちる感覚を何度もくり返していくうちに、頬に当たる冷たい風を感じた。

すっかり慣れてしまった衝撃があつて、体が止まつた。

「メグミちゃん、もう田を開けてもいいよ」

そう言われて、おそるおそる田を開けてみる。まぶたの上にあつた『田隠し草』の一枚の葉っぱは、スルリとはがれて落ちた。

最初に田に入ったのは、『ロロロロと石が転がつた地面。そして全

体的に、かすんで見える風景。

「ここが　ここが早池峰の女神様の、御座所つてト「」なの？」

夏なのに、肌に触れる風、肺に流れてくる空気はとても冷たい。Tシャツのそでからのぞく腕に、鳥肌が立つていて。

「御座所つて言われる奥宮は、まだ上だよ。さすがに神様が直接守つている場所だからね。いきなり飛んで行く、ってワケにはいかないんだ。ここから少し歩くけど、ガマンして」

「うん、大丈夫だよ」

「そうだ。少しくらい、苦しい思いをしなくちゃいけないんだ。アタシのせいだ、こんな事になつたんだもん。」

「早く行こう」

立ち止まつていると、吹いてくる風に体温を持つていかれる。動いている方が、温かいかも知れない。

歩き出そうとしたアタシは、そでを引っ張られる感覚で足を止めた。

振り返ると、汀ちゃんがTシャツのそでをつかんでいる。

「待つて、メグミちゃん。奥宮に向かつ前に、いくつか確認しなきゃいけない事があるの」

「え？ 確認？」

「うん。変な事聞くけど、メグミちゃんつて、月のモノはあるの？ 月のモノ？ それつて……。

「もしかして、生理のコト？」

「何でそんな事、聞くんだろ？ 見れば、流は居心地悪そうに、どこか別の方を見ている。

「まだ……始まつてないけど。それが何か、関係あるの？」

「『めんね、変な事聞いて。この早池峰山は、もともと『女人禁制』の山で、女人が足を踏み入れると山が荒れるって言われてたの。

今はさすがにそんな事はなくなつたけど、昔は、女人人はこの山に登つてはいけない決まりになつてたのよ

「ふつうの登山客ならかまわないんだけど、今回、オレたちは早池峰の女神に会うために山頂を目指してる。女神の機嫌をそこねないよう、出来るだけ作法を守つた方がいいと思つてさ」

『女人禁制』とか『作法』とか、いつものアタシの生活の中には存在しない言葉。それが、この場所は『日常』とはちがつ事を教えてくれる。

アタシは確かに、「神様の土地」にいるんだ。改めてそう思つと、何だか背筋が伸びた気がしてきた。

「オレは男だし、汀は六歳だから、まだ『人』のうちに数えられない。メグミちゃんはもう七歳を過ぎてるし、もしも月のモノが始まつていた場合は、禁忌に触れる事もあるからね。だから確認させてもらつたんだ」

流つてば、本当にアタシと同じ歳なの?

何よ、その『キンキ』つて?

疑問が、まんま顔に出たみたい。アタシを見て汀ちゃんが説明してくれた。

「『禁忌』つて、やつてはいけないつて事。女人人は早池峰山ではなく、向こうの鶴頭山に登つていたの。でも『女人禁制』もずっと前に解けたけどね。だけど、女神様を怒らせたりしないように、メグミちゃんは山頂に向かつて息を吐かないように、気をつけて」ここはアタシの知つている世界じゃない。だから、世界を良く知つているらしい、流と汀ちゃんの言うとおりにしよう。

分つたというしるしに、二人に向かつて軽くうなづいて見せた。流、アタシ、汀ちゃんの順に歩き出した。

山頂つて、アタシの向かう先だよね。その方向に息を吐かないなんて、大丈夫なのかどうか不安だつたけど。

でも歩き出してみたら、それどころじゃないのが分つた。足元は大きな石や、とんがつた石が「ロロロロ」していて、下を向い

て注意して歩かないと危なくってしょうがない。

しばらくの間、誰も何もしゃべらずに、ただ歩いていた。動いたからかな。さっきほど冷たい空気は気にならなくなってきた。……空気は気にならなくなってきたけど……。

「ねえ……」

返事はない。

「ねえ、誰か何かしゃべってよ」

「メグミちゃん、疲れた?」

「いや、そうじゃなくて」

顔をあげるわけには、いかない。山頂に向かって息をしちゃいけないから。周りの景色を見る事も出来ない。

「下ばかり見てるからさ。話でもしてないと、気分が落ち込んできちゃう」

「それも、そうか。じゃ、何を話す?」

「うーん、何つて言われても……」

「転ばないよ、気をつけて。顔をあげないよ、注意して。」

「あ、そーだ。早池峰山の女神様つて、どんな人なの?」

言つてしまつてから、気がついた。『女神様』つて言つてんのに、『人』つて何だよ? 自分の言葉に、思わず笑つちゃう。おっと、

危ない危ない。山の上に向かって、息を吐いちゃいけないんだった。

「早池峰の女神の事か。そうだね。少しは気がまぎれるかも」

アタシの前を歩いていた流が、ちょっとだけ笑つたような気がした。見たワケじゃないから、よく分んないけど。でもきっと、まちがつてないと思う。

それから歩くテンポに合わせて、早池峰山の女神にまつわる話をしてくれた。

昔むかし、姉妹の女神がいて、ずっと二人で旅をしてきた。ある時、遠野の小出こいでという場所にある峰に差しかかった時、早池峰山の姿を見て、「何とかしてあの美しい山の神様になりたいもの

だ」と話し合つた。

そこで姉妹は「枕元に清らかな靈花の降りて来た者が、早池峰山の神様になる」と決めて、床に就いた。

姉神の方はすぐに寢つてしまつたが、するがしこい妹神は寝たふりをしたまま、じつと様子をうかがつていた。

やがて明け方になり、姉神の枕元に蓮華の花が降りて来ると、すぐ飛び起きて花を奪い、「私の枕元に降りて来た」と言つて早池峰山に行き、そこまま山の神になつてしまつた。

残された姉神は五葉山の神になつたと伝えられている。

「他にも伝わつてゐるけど、大体は同じタイプかな。話に出て来る女神は、二人姉妹だつたり三人姉妹だつたりするね。で、妹が姉を出し抜いて早池峰の神様になつちゃうんだ」

流が話してくれたのは、今まで聞いた事もないものだつた。

「お姉さんのトコロに来た花を、盗んじやうわけ? 神様なのに?」

変なの。盗んだり、ウソついたり。ぜんぜん神様っぽくないや。

「うん、神様なのにな。でもこんな女神様だから、一生に一度なんらどんな願いもかなえてくれるとか、人のモノを盗んでも許してくれるとか、言われてゐるんだよ」

アタシの後ろからついて来る汀ちゃんが、やつぱり少しだけ笑いながら、流の話に付け足してくれた。

「三十分くらい歩いたかな。石ばかりだつた視界に、木で出来た道が見えてきた。

「ここから山頂までは、木道になつてゐるんだ。少しは歩きやすいと思つよ」

流の言葉通り、「ゴロゴロと石の転がる登り道よりも歩きやすかつた。やすかつたけど。

「……す、すべる……」

何人の人が、頂上を目指して歩いただろう木の道は、ふみしめられ、けずられ、その上、山頂にかかる霧のせいが、ぬれていってよ

くすべる。

それに、高い山の上って空気がうすいんだっけ？ 息が苦しい。顔をあげずに、ずっと下を向いて歩いているから、よけいにそう感じるのはも知れない。

立ち止まって空を見上げ、思いつきり深呼吸したくなつた。でも、きっとダメ。一度立ち止まつたら、歩き出せなくなつちやう。だからアタシは、歩き続けなくちや。

どのくらい歩いたのかな。周りの景色は、すっかり霧の中でボンヤリとしている。

「メグミちゃん、がんばって。もう少しだから」

後ろから汀ちゃんが声をかけてくれた。アタシよりも年下なのに。

アタシより、大変だと思うのに。

「うん、ありがとう、汀ちゃん」

ちょっとだけふり返つて、汀ちゃんに笑つて見せた。

歩いて、登つて、いいかげんヒザガクガクし始めた時、先を行く流の背中にぶつかつた。

「ふあっ！ 何？ ビうしたの？」

ぶつけた鼻に当たった手を、あわてて口元に移動させて流を見た。

早池峰の女神さま

「メグミちゃん……。お迎えが来てる」
そう言つて、流は少しそよけてくれた。そのおかげで道の先が見えた。

霧にぬれた木道が終わつていて、そこには白い鹿がいた。額に金色の星をつけた、白い大きな鹿。

「あれつて、アタシの夢の中に出てきた鹿だ」

「うん、早池峰の女神様のお使いの鹿だね。きっとオレたちを迎えたんだ」

アタシは注意深く口元をかくしたまま、脇へよけてくれた流を追い越して、白い鹿の前に立つた。

どうしてだか、そうしなくちゃいけないような、そんな気がしたから。

鹿の真つ黒な目が、アタシをじっと見ている。

「来たよ。アタシを赤ちゃんのトロロに、連れて行つてくれる?」
あれだけ体は温まつたはずなのに、ほんの少し立ち止まつただけで、体温がどんどん山の風に持つていかれてしまう。

白い鹿はしばらくアタシをみつめた後、クルリと向きを変えた。
霧をかきわけるように足を進める鹿の、そのピンと立つた短いシッポを目印にして、アタシと流と汀ちゃんは山頂の奥宮を目指した。目の前の鹿の大きな角の先に、ボンヤリと黒いカゲが見えてきた。

「あれが、早池峰山奥宮だよ。メグミちゃん」
流が教えてくれた。

大きなゴツゴツとした、黒い岩。長い刀のような形をしたモノが、何本か立つていて。

「奥宮」つていう言葉から想像していた、キレイで人がたくさんいて、神社みたいな建物なんかじゃなくて。

黒い岩の前にある、古ぼけた小さな、お社。それが『早池峰山奥

宮』だつた。

色々な意味で、期待を裏切つてくれたお社の前に、あの、夢に出てきた女人人が立つていた。

長い髪に飾つた花。七夕の織姫様みたいにヒラヒラした着物。優しそうに見えるのに、何だか、とても口ワク感じる。白い鹿が女人の側に近寄ると、その人は鹿の長い首をそつと/or>でてあげた。

「人」つて言うのとは、ちがうのかな。『女神様』だもんなあ。

アタシがそんな事を考えているうちに、女人視線を「チラ」に向けた。

「よく来ましたね、メグミ」

「あなたが……早池峰山……奥宮？」

「いかにも。わたくしが、この山の守護。早池峰山奥宮」やつと。やつと、たどり着いた。ここが目指してきた、山頂のゴルなんだ。

『早池峰山奥宮』と名乗つた女人……じゃなくて、女神様は、アタシの後ろに立つていた流と汀ちゃん兄妹に目を移した。

「そう。お前たちが、メグミを案内してくれたのだね。淵の子河童」は？ 今、何て言つた？

「カツパ？ 二人が？ はあ？」

口に手を当てたまま、あたしは女神様相手に、スゴい声を出して聞き返してしまった。

「だつて……カツパ？」

「よい。すでにここは山頂。よく言われた事を守り、我慢しました。もう手を離しても、禁忌には触れぬよ」

そう言われて、ちょっとだけホッとして、アタシは手を下ろした。

「あの カツパつて？」

「おや、知らなかつたのですか？ この二人は、カツパ淵の子河童。人間ではないのですよ」

え……どういう事?

思わずふり返って、流と汀ちゃんの二人を見る。

「……『めんね、メグミちゃん。ウソをつくなかったんだけど……』

「言い出すタイミングがなかつたし、それに、せつかく仲良くなつたメグミちゃんが、本当の事を知つたら私たちをキライになるかな、つて」

さびしそうな、悲しそうな顔をして、一人はアタシに言つた。

「そんな……そんな事……」

ないつて言える? あの時、川の土手で『カツバ淵』について一人が話してくれた。その話をアタシは、笑つたんだつた。

『カツバなんて、いるワケないじゃない』

アタシの言葉を、流と汀ちゃんの二人はどんな気持ちで……。

「メグミちゃん。オレたちは昔、新家のだんなさんに助けられた河童の、その子孫だよ。

命を助けられた恩返しに、ずっと新家の子供たちを見てきた。メグミちゃんのおばあちゃんも、メグミちゃんのお母さんも、オレたちの友達だつたんだよ」

「だけどやっぱり、河童だつて事はだまつてたの。いつか恩返しが出来るように、お兄ちゃんと私は、新家の子供たちと仲良くなつて友達になつた。そして、メグミちゃんに会つたのよ」

「これでようやく、恩返しが出来る。そう思つた。だからオレたちは、メグミちゃんの力になろう。メグミちゃんを助けよう、つて」「でもね、メグミちゃん。私たち、本当にメグミちゃんと友達だつて思つてるから。

メグミちゃんとお話して、遊んで、本当に楽しかつたんだから。恩返しだけなんかじゃ、ないからね。信じて、メグミちゃん」

ちょっとだけ笑つたその顔は、やつぱり一人ともよく似てる。兄妹なんだから、当たり前か。

「うん、信じる。だつて、二人はアタシを助けてくれたじゃない。

「今までつれてきてくれたじゃない。アタシも流と汀ちゃんの事、大事な友達だと思ってる。そりや、一人がカツパだつて言われて、ちょっとビッククリしたけど」

アタシはまっすぐ、早池峰山の女神様の方を見た。

「カツパでも人間でも、友達だつて事に変わりはないよ」

二人は約束通り、女神様の御座所まで案内してくれたんだもん。

次は、アタシががんばらなくちゃ。

「早池峰の女神様。赤ちゃんを。赤ちゃんをパパとママに、返して下さい。お願いします」

アタシを見ている、奥宮の女神様の視線がイタイ。全身に見えない細いハリが、チクチクとさつていてるみたい。

「その願いを、かなえてあげる事は、出来ません」

冷たく静かで、そつけない女神様の言葉。

「どうして？ どうして、返してくれないの？ あなたが勝手に、赤ちゃんをつれて行つたんじゃない。だからアタシが、つれ戻しに来たのよ。赤ちゃんを返してよ」

「メグミちゃん、ねえ、ちょっと……」

アタシの言葉をさえぎるように、汀ちゃんが後ろから腕を引っ張つたけど、その手をふりはらつて言葉を続けた。

「あなたは一生に一度なら、どんな願いもかなえてくれるんでしょ？」

「だつたらお願ひよ。赤ちゃんを返して！」

アタシの怒鳴り声にも、相手の表情は動かない。

「それでは、あの時『赤ん坊なんかいらない』と、そう願つたのは本心ではなかつたと言つのですか？」

女神様のその一言は、アタシの胸につきさつた。一瞬、返す言葉にツマる。

「そ、それは……。そんなの、本気じゃなかつたわよ。あたり前でしょ、決まつてるじゃない」

精一杯の強がり。よつやく、これだけの言葉をしぼり出した。でも

「それは、嘘。あの時、そなたが口にした言葉は、本心から出たものだつた。でなくては、わたくしに届くはずはないのです」
必死に否定したアタシの言葉は、あつといつ間に打ちくだかれてしまつた。

くやしい。何も言い返せない。

赤ちゃんをいらないと思つたのは、アタシの本音。
そんな自分の「本当」をつきつけられて、思わずウソをついてしまつたアタシ。口々に来てまで、ウソをついてしまうアタシを、簡単に見破つてしまつた女神様。

アタシはココへ、何をしに来たの？ 少なくとも、女神様に言つて訳をするためにじやあ、なかつたはず。

これじやあ、口々までつれて来てくれた流と汀ちゃんに会わせる顔がないよ。

自分たちの大事な秘密を明かしてまで、アタシを助けてくれようとしているのに。アタシがこんななんじや、ダメだ。

「そうだよ。あなたの言つ通り、あの時アタシは本気で、赤ちゃんがいなくなればいいと想つた。赤ちゃんさえいなければ、パパとママはまた、アタシだけを見てくれる。そう思つたから。でも」「泣きさけんでいたママと、その背中を支えていたパパの姿。二人をつらそうに見ていた、おばあちゃん。

誰もアタシのを見てなかつた。赤ちゃんが戻つてこなかつたら

？ きっとパパもママも、アタシを見てくれないままだと思う。
「でも、ダメなんだ。赤ちゃんがいなかつた事には、ならないよ。パパもママも、赤ちゃんがいなくなつた事を忘れたりしない。いつも忘れるはずがない。もしもパパとママがアタシを見てくれても、それは、アタシの後に赤ちゃんを見ているんだと思うし、それに赤ちゃんがいなくなつた本当の理由が、アタシなんだつて、パパとママが知つたりしたら

「二人は絶対に、アタシの事を許してくれないだろ？」

そんな事、考えただけで体がふるえる。

「ならばわたくしが、そなたの両親から赤子の記憶を消してあげましょう。そうすれば一人は、そなだけを見てくれるでしょう」「アタシの心をテストするよつこ、甘い言葉が女神様の口からこぼれた。

一瞬、気持ちがグラッと動く。

赤ちゃんの記憶がなくなる? 赤ちゃんがいた事を、パパとママが忘れる? それなら……。

「そうすれば父も母も、そなだけを見てくれるでしょう。ビリビリする?」

アタシだけを……見てくれる?

右へ左へとゆれていたアタシは、流の声にハッとした。

「メグミちゃん、思い出してよー。君は「」何をしに来たのか。何を願いに来たのかを!」

何を? 何をしに? 何を願いに? 決まってる、そんな事。

「アタシは……赤ちゃんを取り戻しに、返してもらつたために来たのよ。たとえパパとママが赤ちゃんの事を忘れても、アタシは忘れない。パパとママを見るたびに、自分のやつた事を思い出すわ」

女神様がマジマジとアタシの顔を見た。おかしいけど、この時初めて、女神様がアタシを見たような気がした。多分、それはハズレでないんだろうな。

きっと女神様は、今になるまでアタシを見てなかつたんだ。これまでアタシが感じてきた女神様の視線は、アタシの内側を見ていたのかも知れない。

「自分の罪悪感がつらいと言つなら、そなたの記憶も消してあげますよ。どうしますか?」

「そんなコトしなくていいから、赤ちゃんを返して」

アタシもまっすぐに女神様を見る。

もう迷わない。迷つてゐる場合ぢや、ないんだから。絶対に赤ちゃんを、つれて帰るんだから。

「心が決まったよつですね。しかしだからと言つて、簡単に赤ん坊

を返してあげるわけにはいきません。そなたの一生に一度の願いは、すでにかなえられてしまいました。このまますんなりと、そなたの「一度目の願いをかなえるわけには、いかないのです」

「じゃあ、どうすればいいの？ どうすれば、赤ちゃんを返してもらえるの？」

何を言われるのか、正直、とても口つかつた。でも口口まで来て、引き下がるワケにもいかないんだ。

アタシは精一杯強がつて、女神様にらみつけた。

「ホホ。そんなに怖がらなくとも、大丈夫。何も取つて食おうとか、生命を差し出せなんて事は言いません。でも、一生に一度の願い、それに見合つだけのものを差し出してもらいます。当然でしょう？」

うん、確かにその通りだと思つ。

アタシは一度、願いをかなえてもらつた。自分の本心からの願いを。

それをなかつた事にして、まじまじと、やつぱりタダで、と黙つのは虫がよすぎるか。

「分つたわ。アタシが持つているモノなら、何でもあげるわ」
ゴクリとツバを飲みこむ。喉の鳴る音が、妙に大きく感じられた気がした。

「では……」

急に女神様が大きくなつたように思えた。ううん、実際に大きくなつたワケじゃない。女神様の大きさは変わらないのに、アタシが感じる女神様の気配が大きくなつたって言つのか。うまく伝えられないよ。

「そなたの記憶をもらいましょう」

「記憶……アタシの？」

アタシへの罰

「そうです。この遠野に来てから子河童たちと出会い、わたくしの元までやつて來た、その記憶を頂きます」

「それって……」

それつて、流や汀ちゃんとたちと過(じ)した時間の記憶を……、アタシの友達との想い出が、全部消えちゃうつて事?

「そんな

「そなたが望んでいるのは、そう言つ事なのです。そなたが願つたのは、天から与えられた一つの生命を、この世から消し去る事。決して許されない願いを、そなたは口にしたのですよ」

厳しい言葉がアタシにつきささる。

「許されない願いをなかつた事にする。それに見合つのは、願つた本人が大事に思つている『心』しかないので」

打ちのめされた氣がした。『本心』で願つた事は、『本心』でなければ取り戻せない。それだけの事を、アタシは望んだんだ。ゆつくりとふり返る。

アタシよりも大人びた目をした流。人なつっこい笑顔のカワイイ汀ちゃん。

知り合いもいないこの遠野で、アタシと仲良くしてくれた二人。真剣にアタシの話を聞いてくれた。こんな所まで、アタシをつれて來てくれた。

大事なアタシの「友達」。

なのに、その二人の事を忘れなきやいけないなんて。

「そんなの……ヤダ……」

「でもメグミちゃん。赤ちゃんが……」

「だつて!」

涙があふれてきた。二人の顔がにじんで、ゆがんで見えた。

「せつかく仲良くなれたのに! 一人はアタシの事を助けてくれた

のに！ それなのにアタシは、流の事も汀ちゃんも忘れちゃうんだよー！」

学校にだつて、こんなに大切に思える友達はいないよ。

「忘れない！ 忘れるなんて、ヤダ！」

しゃくり上げるアタシの手を、優しい温度が包みこんだ。

「泣かないで、メグミちゃん」

「汀ちゃん」

「そんなにオレたちの事を、思ってくれてありがとう、メグミちゃん」

「流」

二人がそつと、アタシの手を握ってくれている。

「大丈夫だよ。私たちは忘れないから」

「メグミちゃんが忘れても、オレたちがずっと覚えているから」

手から伝わる温度と同じ、優しくて、柔らかな笑顔。

「あつたかい」

一人の本当の姿は、カッパなんだつて。アタシ、カッパの手つてもつと冷たくてヌルヌルしてて、気持ち悪いと思つてた。だけど流と汀ちゃんの手は、あつたかくつて、気持ちがいい。

このあつたかい手を、ずっと離したくないと思つた。あたしが心細くなつた時に、いつも力づけてくれた優しい手。

「大丈夫だよ、メグミちゃん。一度は友達になれたんだ。次に会つた時だつて、オレたちはきっと友達になれるよ」

「メグミちゃんが忘れても、私とお兄ちゃんは忘れないよ。私たちが本当は『河童』だつて知つても、友達だつて言つてくれたメグミちゃんを、絶対に絶対に忘れないから」

「だから、メグミちゃん」

「今は迷わず、赤ちゃんをつれて帰つて」

強い視線。迷わない視線。

「ありがとう、流、汀ちゃん。二人に会えて、アタシ、本当によかつたと思つて。一人と友達になれて、本当によかつたと思つ

てる。これで流と汀ちゃんの事を忘れちゃったとしても……」「

アタシは顔をあげて、しっかりと二人を見た。ちゃんと伝えなきや。忘れてしまふなら、なおさらだ。

「一人の事、忘れちゃったとしても、ずっとずっと友達だからね！」

「うん！」

とびっきりの笑顔で、流と汀ちゃんがうなずいてくれた。

アタシは流と汀ちゃんと手をつないだまま、女神様の方へ向き直った。

「早池峰の女神様。決めました。アタシの記憶を差し上げます。だから、赤ちゃんを妹の笑美を返して下さい」

赤ちゃんを……初めて『妹』って呼んだ。『笑美』って。アタシの妹。

「決めましたね。分りました。そなたの願いをかなえてあげましょ

う

静かに言つた女神様は、両手を空に向けて伸ばした。見ていると、空中に光の球があらわれた。うすいピンク色をした光の球は、どんどん大きくなつて、ちょうど丸い形をした座布団と同じくらいの大きさになつた。

おばあちゃん家にあつたのと、おんなじくらいかな。よくママが、笑美のコト寝かしながら遊んでたつ。

そんな事を思つているうちに、光の球は女神様の両手の腕の中におりて來た。

うすピンク色の光が消えるとそこには、女神様に抱かれてスヤスヤ眠る、小さなアタシの妹がいた。

「……赤ちゃん」

「さあ、メグミ。そなたの望み、そなたの妹です。しっかりと抱いて上げなさい」

そつと田の前に差し出された赤ちゃんは、本当に小さくて、ちょっとした事でコロれてしまいそうだった。

「そう、頭はこうやってヒジに乗せて。おしりを支えるんだ」

流が赤ちゃんの抱き方を教えてくれた。眠ってる赤ちゃんは、何だかグンニヤリしていて、それでいてとても温かかった。小さな目、鼻、口。こんなに小さいのに、手にも足にもちゃんと、指も爪もある。この体の中では、アタシと同じように、心臓がドキドキと音を立てて動いてるんだ。

「カワイイ赤ちゃんだね。メグミちゃんの妹、笑美ちゃんって言つんだ」

「うん。この笑美ちゃんがいてくれたから私たち、メグミちゃんと友達になれたのね」

ハツとした。そうだったんだ。パパとママがあんまり赤ちゃんのコトばっかり見てるから、アタシはカツパ淵に行つたんだつた。もしも赤ちゃんがいなかつたら、川へ遊びに行く事はなかつたかもしない。

「そうだね。一人と仲良くなれたのは、笑美のおかげなんだね」

しつかりとした重さを感じさせる赤ちゃんは、アタシの腕の中で安心しきつた様子で、静かに寝息をたてている。

「よきかな善哉」

女神様が厳かに言つた。

「では約束通りそろそろ、そなたの記憶を頂きましょ」

「あ、まつて。ちょっとだけ、まつて下さー」

今、記憶を消されちゃつたら、大事なコトが伝えられなくなっちゃうよ。

女神様がうなずいてくれたのを確かめてから、流と汀ちゃんの二人に視線を戻した。

「あの……何て言つたらいいのか……。ここまで来れたのも、妹を返してもらえたのも、流と汀ちゃんのおかげだよ。本当にありがとう」

二人の兄妹に向かつて、頭を下げる。

考えてみたら、初めてかも知れない。誰かに頭を下げるほど、感

謝したことなんて。きっと誰でも、心の底から感謝した時には、自然と頭が下がるんだ。だからコレが、人間の出来る一番素直な感謝の形なんだと思う。

「オレたちは、何もしてないよ。ただメグミちゃんの味方だった事と、山頂まで道案内をただけだよ」

「がんばったのは、メグミちゃんだもの。赤ちゃんを返してもらえたのだけ、メグミちゃんの力だよ。私もお兄ちゃんも、メグミちゃんのがんばりがなかつたら、ここまで来ることも出来なかつたと思うし」

本当にこのまま、一人の事を忘れてしまうのかな？ もう一人を見かけても、何とも思わなくなっちゃうのかな？

一人の事、全部忘れてしまわないように、流の顔と汀ちゃんの顔をジッと見た。絶対に、全部忘れたりしない。きっと覚えておくんだ。

「アタシ、二人の事、きっと思い出すから。忘れてしまつたりしないから」

「うん。オレたちも、メグミちゃんを忘れたりしないよ」

「大丈夫。きっとまた会えるから。今は赤ちゃんを、早くお母さんに返してあげて」

流と汀ちゃんの優しい笑顔をしつかりと田に焼き付けて、アタシはもう一度、深く頭を下げた。

「本当に 本当にありがとう」

頭をあげると、赤ちゃんを抱いて女神様の方へ向き直った。

「……お願いします」

「わかりました。さあ、こちらく」

二・三歩、女神様の方へ近づく。おでこに女神様の白い手が触れた。少しヒンヤリとして、心地いい女神様の手。

「心配しなくても、そなたと赤ん坊は、ちゃんと無事に送り届けてあげます」

自然とまぶたが降りてくる。赤ちゃんを落とさないようにな、しつ

かりと抱える。

田を閉じてるんだから、視界は暗いはずなのに。なのに、まぶたの裏には光が見えていた。何だかとっても、気持ちがいいよ。

その気持ちよさに心と体をあずけて、アタシは光の中に浮かんでいった。

ふわふわと。ふかふかと。

腕の中で眠る赤ちゃんと一緒に、アタシは光に包まれていった。

新しい一步

「おーい、メグミー。早くしりょーーー。」

玄関でパパが呼んでいる。

「はーい、ちょっとまってーーー。」

最後の荷物をカバンにつめて、忘れ物がないかどうか、部屋の中を見回す。

うん、大丈夫。忘れ物はないみたい。

自分のカバンと、横に置いてあつた大きなカバンを持ち上げる。おおつと、こんなに重たいんだ、赤ちゃん用の荷物つて。色々と入ってるもんねえ。

オムツに、タオルに、ミルクに、着替え。赤ちゃんを育てるつて、大変なんだ。

妹がいなくなつたつて、大騒ぎになつたあの日。

いつの間にかおばあちゃんの家を抜け出してしまつたアタシの事に気がつき、ママはそれこそ、狂つたように泣きさけんだんだつて。アタシも赤ちゃんも、いなくなつてしまつたつて。

お巡りさんや近所の人たちがみんなで、アタシと妹を探し回つてくれたらしい。

夕方近くになつて、カツパ淵の「お乳の社」と呼ばれているお社で、眠つているアタシは見つかつたつて言われた。腕にしつかりと妹を抱いて。

目が覚めたアタシは、おばあちゃんの家に戻つて、色々な事を聞かれたんだけど……。でも、何も答えられなかつた。

赤ちゃんはどこで見つかつたのか？

どうやつてつれ戻したのか？

誰かにつれ去られたのか？

見つけられるまでどこにいたのか？
誰かと一緒にだったのか？
などなど。

だけど、いくら質問されたって、何も分らないし、何も覚えていないから答えようがなかつた。

ママは涙で顔をクチャクチャにして、アタシと妹を抱きしめてくれた。

パパははちょっと怒ったような、それでいて安心したような顔をして、側に立っていた。

おばあちゃんは涙ぐみながら、だまつて温かいココアを出してくられた。

知らないうちに冷えてしまった体に、温かいココアはすくおこしく感じられた。

結局アタシが何も覚えていない事が分ると、大人の人たちは納得がいかない表情で、それでもアタシと赤ちゃんが無事に戻つてきたのを喜び、安心して帰つて行つた。

帰りぎわにお巡りさんが、「早池峰さんの気まぐれか、河童のいたずらかも知れん。何にしても、一人が無事に見つかって良かつたよ」と言い残していた。

起き出して元気に泣き声をあげた赤ちゃんは、よほどお腹が空いていたのか、ママのおっぱいに吸いついている。

自分でも不思議なほど、落ち着いてそれを見ているアタシがいる。そんなに時間がたつたワケじやないのに、今では心に波が立つ事もない。赤ちゃんを抱いているママを見ても、もうイヤじやない。アタシの中から抜け落ちてる記憶の中では、一体何があつたんだろう？
アタシと赤ちゃんは、どこに行つて、何をしていたんだろ？

「おーい、まだかあ！」

パパの少しイラついた呼び声に、アタシはハツとして考え方から

気持ちを戻した。

「はあい、今行くからー！」

大きなカバンと小さなカバンを持つて、アタシは部屋を出た。
玄関ではおばあちゃんとパパが待っていた。大きい方のカバンを
パパに預けて、アタシはおばあちゃんにあいさつをした。

「おばあちゃん、お世話になりました」

「はいはい、どういたしまして。色々あつて大変だったけど、忘
られない夏休みになつたねえ」

アタシはふり向いて、おばあちゃんの家を見ながら答えた。

「うん、そうだね。いつもの夏休みとは、ちがつた夏休みだつたも
んね。忘れられないよ」

また待たせるとパパが文句言つから、とクツをはいでいると、お
ばあちゃんが紙袋を差し出してくれた。

「はい、コノ。お土産にどうぞ」

「うわ、コレつて『明がらす』？ アタシ、このお菓子、大好きな
の。ありがとうございます、おばあちゃん」

パパとママと赤ちゃんの待つている車に乗りこむと、窓を開けて
顔を出した。

「おばあちゃん、またね！」

「ああ、またいつでもおいで」

そしてアタシに顔を寄せて、コソッと教えてくれた。

「メグミちゃんが生まれた時も、パパとママは大事に大事にしてく
れただよ。一分だつて手離さないくらい、いつも一人で抱っこし
ていたんだからね」

「ホント！？」

聞き返したアタシの声は、出発するが、と言つパパの声に消され
てしまつた。

「おばあちゃん、バイバイー！」

動き出した車の窓から手をふると、おばあちゃんも手をふつてくれ
た。

「さあ、家に帰るぞ」

運転席のパパがバツクミラーで、後ろの座席のアタシと赤ちゃんを見た。

「メグミ。笑美の事、見ててね」

助手席のママが、アタシに向かって笑いかけてくれた。

「うん、分った」

アタシのとなりには、チャイルドシートがあつて、赤ちゃんが静かに眠っている。

「おっぱいは飲んだの?」

「さつさ、お腹いっぱいね。しばらくは、起きないと思つわよ」

「ふーん」

アタシは赤ちゃんの顔をのぞきこんだ。

ちっちゃな鼻。息をすると、ピクピクする。

ちっちゃな口。歯はまだ全然はえてなくて。だけど上と下の歯ぐきの間に、ピンク色の舌をフタみみたいにピタッとはさんでいる。うつすいマコモ。ほつそい髪の毛。生まれた時から、毛つて生えてるんだ。

視線を上げれば車は、遠野市内へ向かう道の途中にある「奥田橋」という橋を渡るところだった。

橋の下を流れる小さな川。この川も、あのカツパ淵につながっているのかな?

そんなコトを思いながら橋の下に田を向けると、土手に人が立て手をふっているのが見えた。

男の子と女の子。兄妹かな?

でも、あれ? どつかで見たことある?

車は橋を通りすぎ、二人の姿は小さく小さくなつていって、とうとう見えなくなつてしまつた。

あれは誰だつたんだろう? 知らない人のはずなのに、何だかとても心が動く。

すごくすごく、大事な事を忘れていて、思い出せないような感じ。

チャイルドシートの中の妹が、眠りながらアタシの指を握った。

その温かくてやわらかなキュッという感触に気づいた時、アタシは急に涙があふれて止まらなくなってしまった。

アタシ、どうじゅわったんだろ？

「メグミ。パパとママ、おばあちゃんに叱られつけたわ」

助手席からママが声をかけてきた。

「もつと氣をつけないと、メグミにさびしい思いをさせてるつて。まだまだ親に甘えたい年頃なのに、ムリに大人みたいに我慢をされてる、ってね」

「ママ……」

「赤ちゃんの事ばっかりで、さびしい思いをさせないめんね、メグ

「ほっぺたを流れる涙があつたかい。

（よかつたね、メグミちゃん）

（お父さんもお母さんも、ちゃんとメグミちゃんの事、思つてくれてるじやないか）

胸の奥が見えないモノで満たされて、いっぱいになつた。

「流……汀ちゃん……」

思い出した。優しい兄妹の声を。

知り合つて短いアタシのために、力をかしてくれた不思議なカツバの兄妹の事。

「メグミ、どうしたの？ どこか痛いの？」

ママが泣いてるアタシをのぞき込んで、ビックリして聞いてきた。

「ううん、ちがうの。うれしくて。アタシこそ、ごめんなさい。色々とヒドイ事言つたりして」

自然と言葉が口から出て来る。

大きな大きな重しが取れて、心の一番奥にあつた箱のフタが開いたような気がした。

箱の中につまっていたイヤなモノが、一気にはじけ飛んだみたい。まるで、誕生日に鳴らすクラッカーみたいだ。

アタシは眠つて いる笑美を見て、そつとつぶやいた。

「こんなお姉ちゃんだけど、ヨロシクね」

そして窓の外を見て、大事な友達に思いを飛ばした。

（ありがとう、流。ありがとう、汀ちゃん。アタシ、もう大丈夫だ
よ。またいつか、きっと会えるよね）

窓の外に広がる空は青くて、広くて。

アタシにとって、忘れられない夏休みは、まだまだ終わりそうに
ない。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5209t/>

河童と女神と夏休み～あたしの遠野物語～

2011年6月13日23時26分発行